

# COVID-19のパンデミックの なかで思うこと

— 世界のこと、子どものこと —

堀尾輝久

ほりお てるひさ  
東京大学名誉教授、子どもの権利条約市民・NGOの会代表  
元民主教育研究所代表運営委員、元日本学術会議会員  
主な著書 『教育入門』(1989年) 『現代社会と教育』(1997年)  
『人権としての教育』(2019年) (以上、岩波書店)  
『未来をつくる君たちへ』(清流出版、2011年)

## Ⅰ 自己愛と利他愛

世界中のコロナ禍の情報のなかで、高齢で糖尿病の我が身はもつぱら自粛という名の閉塞の状態だが、頭だけは世界に開かれている。それにしても自粛は萎縮ではなく、社会的距離は孤立であってはならない。自分を守ることが貴方を守ること、自己愛と利他愛はひとつのこと。この良識(真実)を言葉ではなく、身体を通して、

の大きさ、広がり、速さ、対策の違いは明らかであり、医療体制、社会保障のあり方の違いが目に見えるようになってきた。新自由主義のもと医療・福祉を切り捨て、社会の格差を拡げてきた国では医療崩壊を早め、社会的弱者の感染・死亡率の高さは社会的貧困と連動し、それは人間の尊厳を奪う埋葬のされ方にも現れている。貧困と格差の差別的構造は地球規模であることをコロナは逆照射して可視化させている。手洗いしろといっても水がないのだ。感染爆発は当然の成り行きなのだ。

他方でしかし、科学と医療に国境なしの信念のもとでの国際的連帯も広がり、人々の意識も、医療従事者や介護従事者への感謝と、自分のために耐えることが、他者を守り、世界に広がるパンデミックと闘うことなのだという、人類意識と連帯の感覚を目覚めさせてもくれた。それは市民の参加と信頼に基づく政府の、科学的専門性と透明性のある、未来世代を配慮しての、政策を求める意識と繋がっている。「女・子ども」は無視し、軍拡は止めず、ショック・ドクトリンで利益を狙うなど論外であると言いたいが、これもコロナ社会の現実である。

理解できた人も多いただろう。しかしオリンピックをやるのだからと叫んでいた権力者に、いきなり「検査もしない、補償もない自粛」を説教され、強要されても、それは自粛とはいわないのではないか。不安は監視を呼び、監視のなかの自粛は萎縮となり、監視の内面化は他者への眼差しを変え、「自粛警察」として攻撃性と差別感情をうむ。

ところで、コロナ禍の前で人は平等である。確かにそうだ。しかし国により、地方により、年齢により、被害

## Ⅱ コロナがあぶり出す世界のカゲ

グアテマラ国連事務総長は、三月以降、一斉停戦、とWHOと協力しての貧困層と難民の救済の国際的支援を繰り返し呼びかけた。地球時代の人類の連帯を！

トランプ大統領はWHOが中国寄り、初動の判断を誤ったとして、WHOへの拠出金を引き揚げる決定をし、さらにコロナウイルスは中国武漢の疫学研究所から出されたものだと中国批判を強めている。しかし彼こそコロナを甘く見、アメリカは感染者が少ないと言いつつ、安倍首相とオリンピックも出来ると楽観的であった筈。

三月以降の状況はNYを中心に、全米に広がり、感染者数と死亡者数は一位となっている。医療保険も無く、病院に行けない貧困層や移民の多いヒスパニックの犠牲者が多いのは、新自由主義の先頭を行く「富める国」アメリカが社会経済的には格差・差別の国であることを示している。コロナと向き合い、懸命に努力しているクオモロNY州知事と、選挙目当てのトランプとの違いぐらいは心あるアメリカ市民には判っていることだろう。アメ